第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

ミヤコヒメヘビ

Calamaria pfefferi Stejneger, 1901

太田英利（兵庫県立大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　爬虫類・両生類分科会

環境省 編

令和８（２０２６）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：太田英利，2026．ミヤコヒメヘビ．環境省（編）第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 83-87．

Citation: Ota, H., 2026. *Calamaria pfefferi* Stejneger, 1901. *In*: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 83-87.

有鱗目 Squamata　ナミヘビ科 Colubridae　　日本固有

ミヤコヒメヘビ

***Calamaria pfefferi* Stejneger, 1901**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠB類（EN）　B1ab

基準 A:　—	基準 B:　EN	基準 C:　—	基準 D:　—	基準 E:　—

B1．出現範囲が 5000 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。
a) 生息地が過度に分断されているか、5 以下の地点に限定されている。
【過度に分断】
宮古島、伊良部島ともに、宅地や農耕地の開発にともなう土地の乾燥化が進んでおり、好適な生息環境は明らかに縮小している。また舗装道路、側溝の敷設も確実に増加しており、生息域の分断も進行している。
【地点数】5 地点以下
b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。
【判断理由】
森林伐採や草地開発、土地の造成など。舗装道路や付随する側溝の敷設を目的とした道路工事は生息地の分断を進め、また外来性の捕食者の増加などの影響も強く懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

　宮古諸島の宮古島と伊良部島の固有種で、一年を通して適度に湿った腐植性の堆積物がある場所に生息する。乾燥、過湿、高温に弱く、小型で移動能力も低いため、土地開発や舗装道路・側溝の敷設が、生息地の縮小、分断を引き起こしていると考えられる。外来種のイタチやインドクジャクによる捕食の影響も懸念される。

基礎情報

【形態】

頭胴長は普通 135～180 mm。頭部の幅は頸部の幅とほとんど変わらない。眼は比較的大きく、瞳孔は丸い。尾は全長の 8～10%程度を占め、太短く先端は尖る。胴部背面には体鱗が 13 列に並ぶ。体鱗の表面は滑らかで、虹色の光沢を帯びる。背面の地色は概ね淡褐色ないし黄土色。腹面は、地色は淡い赤褐色で、小黒斑が散らばる。腹板数はオス 142～152 枚、メスでは 158～162 枚。尾下板は左右に二分し、オス 24～26 対、メスは 13～15 対。

【生活史】

これまでに 4～7 月と 11 月に発見されているが、これ以外の季節、とくに 8～10 月の盛夏～初秋に活動するかどうかについては不明。生息密度、繁殖習性、世代あたりの期間、社会構造などについても、一切が不明。餌として確実な捕食記録があるのはミミズ類のみであり、昆虫類も食べるとする記述もあるが、再確認する必要があろう。

【生息環境】

常緑広葉樹の自然林、二次林、低木林の林床、一年を通して乾燥しない土壌を有する草地、石灰岩の岩場などに生息する。ミミズを餌とし、乾燥、高温にきわめて弱く、皮膚の角質層が薄いため過湿にも弱いと思われる。したがって一年を通して乾燥した状態や過湿の状態にならない腐食質の底質と、直射日光を遮る植生や岩などの存在が、生息に必要な条件と考えられる。

生息環境区分：	【陸域_低標高地】森林，草地 【陸域_平地部】森林，草地，耕作放棄地
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域

【分布域】

宮古諸島の宮古島と伊良部島のみに分布する。このうち宮古島では島の中部、東部、南部で、伊良部島では中部と北部で見つかっているが、いずれも発見例はきわめて少ない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

分布域の面積は全部合わせても 50 km^2未満と推定される。本種は上記のように乾燥、過湿、高温に弱くしかも移動能力はあまり高くないことが予想される。分布域の縮小率は不明。

【生息地の現況】

宮古島、伊良部島ともに、宅地や農耕地の開発にともなう土地の乾燥化が進んでおり、好適な生息環境は明らかに縮小している。また舗装道路、側溝の敷設も確実に増加しており、生息域の分断も進行している。宮古島と伊良部島にはともに外来の捕食者であるイタチとインドクジャクが生息しており、その影響も深刻と思われる。

【個体数の現況】

個体数が減少傾向にあるのは、宮古島東部などにおける近年の急激な目撃頻度の低下から考えてもほぼ間違いないが、具体的な個体数推定などは行われていない。

存続を脅かす要因

森林伐採や草地開発、土地の造成など。舗装道路や付随する側溝の敷設を目的とした道路工事は生息地の分断を進め、また外来性の捕食者の増加などの影響も強く懸念される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による）
	（現在）	森林伐採，草地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕食（外来種による）

特記事項

ヒメヘビ属は熱帯アジアを中心に多様化している。本種はこの属の分布範囲の中で東北端に他種とは不連続に分布しており、遺存種と考えられる。乾燥や過湿、高温に弱く、移動能力の低い本種が宮古諸島の一部に固有分布する事実は、この地域が、多くの研究者によってこれまで考えられてきた以上に古い歴史をもつことを意味しており、高い生物地理学的価値を有する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2019：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2018：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2017：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次 2015：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第４次：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第３次：	ミヤコヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第２次：	ヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	EN
第１次：	ヒメヘビ	*Calamaria pfefferi*	R

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧ⅠB類(EN)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inger, R. F. and H. Marx, 1965. The systematics and evolution of the Oriental colubrid snakes of the genus *Calamaria*. Fieldana: Zoology, 49: 1–304.
- Mori, A. and H. Moriguchi, 1988. Food habits of the snakes in Japan: A critical review. The Snake, 20: 98–113.
- 饒平名里美・当山昌直・安川雄一郎・陳 賜隆・高橋 健・久貝勝盛，1998．宮古諸島における陸生 爬虫両生類の分布について．平良市総合博物館紀要，5: 23‐38．
- 太田英利，1982．ミヤラヒメヘビ（*Calamaria pavimentata miyarai*）の死体拾得の報告、およびタイワンヒメヘビ（*Calamaria pavimentata formosana*）、ヒメヘビ（*Calamaria pfefferi*）との比較．The Snake，14: 40‐43．
- 千石正一，1996．ミヤコヒメヘビ．千石正一・松井正文・疋田 努・仲谷一宏（編），日本動物大百科第 5 巻，両生類・爬虫類・軟骨魚類，pp. 97．平凡社，東京．
- 高良鉄夫，1962．琉球列島における陸棲蛇類の研究．琉球大学農家政工学部学術報告，9: 1‐202，22pls．
- 当山昌直，2005．ミヤコヒメヘビ．沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）－レッドデータおきなわ－，pp. 104‐105．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calamaria pfefferi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calamaria pfefferi* is listed as EN under criteria B1ab.

B1. Extent of occurrence estimated to be less than 5,000 km², and estimates indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at five or fewer locations.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Forest, Grassland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】Forest, Grassland, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Grassland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Predation (by alien species)

Law designation status for conservation	—



執筆者:	太田英利（兵庫県立大学）
Author:	Hidetoshi Ota

公表年月：2026 年 3 月